

多様なバックグラウンドの学生と多角的な視点から学ぶ公衆衛生



バーミンガム大学 公衆衛生学修士課程
University of Birmingham, Master of Public Health (Global Health)

鈴木 順子

大阪大学医学部保健学科卒。助産師として病院勤務後、JICA海外協力隊に参加。バーミンガム大学公衆衛生学修士課程在籍。長崎大学熱帯医学研修課程修了。

フィールドでの経験を通して公衆衛生の重要性を実感

私は現在、イギリスのバーミンガム大学の修士課程で公衆衛生学を勉強しています。大学はロンドンに次ぐ大都市であるバーミンガム市に位置しており、大学のすぐそばには、約10年前、パキスタンで銃撃をうけた人権活動家のマララ・ユスフザイさんの治療を行ったクイーン・エリザベス病院があります。

大学卒業後、大阪府内の市立病院にて看護師・助産師として働いていました。助産師を目指したきっかけは、情勢が不安定な低所得国で保健活動に従事する日本人医師の存在を通して、世界には保健・医療へのアクセスが非常に難しい国があることや、当時国連が掲げていたミレニアム開発目標に母子保健関連の目標が多いことなどを知り、国際保健、特に母子保健分野に興味を持つようになったからです。

病院勤務を経て、JICA 海外協力隊に参加しました。西アフリカのベナン共和国に助産師隊員として派遣され、配属先での乳児予防接種の介助や、乳幼児体重測定の実施、村での保健衛生に関する啓発活動など、主に地域保健活動に従事していました。配属先の保健センターでは、私が着任したときは医師が不在の中、厳密には医療資格のない看護助手が分娩介助や薬剤処方を行っていました。乳児予防接種においては、ワクチンの需要と供給が上手く調整されていない、コールドチェーンやインフラの未整備によりワクチンの保存方法が順守できないという状

態でした。記録の取り方も統一されておらず、担当者によって、その質にはかなり幅がありました。これは私の配属先に限らず、多くの保健センターで常態化していたことのように思います。国の上位政策では保健課題に対して非常に的を射た意欲的な内容が記載されているのに、なぜ枝葉の保健センター、コミュニティレベルには上手く浸透しないのだろう、と疑問を感じていました。また同時に、このときは自身が関わっていた地域保健やボトムアップ型の活動は大事だと思いつながりながらも、国として国民の健康を守る取り組みの必要性も感じ、コミュニティだけではとどまらない幅広い公衆衛生活動、保健政策、保健システム構築の重要性を感じました。また、新型コロナウイルス

感染症の影響もあり、保健システムが脆弱な中で、現状把握のための情報収集をどのように実施し、その情報をもとにいかにか政策に落とし込み、国民の健康や安全を守っていくのかという問題にも関心を持ち、これに直結する公衆衛生学をぜひ学んでみたいと思いました。

イギリスの保健システムを基に公衆衛生活動に必要な視点を学ぶ

私が現在所属しているコースは低所得国における公衆衛生というよりも、比較的一般の公衆衛生を学ぶコースのため、イギリス人の学生も多く、留学生は半分ほどです。そのため、授業中もイギリスの医療保健システムをベースにして話が



大学のすぐそばを流れるバーミンガム運河。運河沿いにウォーキングやサイクリングをする人も多いです (出典：筆者)



友人と参加したOpen Air Cinema。大学がこのようなイベントをよく開催してくれます（出典：筆者）



大学にはOld Joeと呼ばれる時計台があります。晴天の日は屋外で勉強や日光浴をする学生が芝生に集まります（出典：筆者）

進んでいくため、それらを理解できていなければディスカッションについていけず、イギリス人のクラスメイトに一時間以上かけてイギリスの保健システムの構成や自治体の役割について教えてもらったこともあります。コースメイトには、すでに公衆衛生分野で働いている人から文系学部出身の人までとバックグラウンド、出身国、年齢層も幅広く、彼らと雑談する時間が楽しく貴重です。

授業では、発表されている論文を読んでcritical appraisal(論文の批判的吟味)をする時間がよく設けられました。論文の読み方を学び、その文献から得たエビデンスやデータの精度を吟味し、それらが実社会で活用できるかを検討する練習のひとつであり、多様な背景を持ったコースメイトたちとグループワークで行うため、意見もさまざままで盛り上がりました。また、アウトブレイク対応についてロールプレイングをする授業も興味深かったです。どの組織・人材を巻き込んで、どのような段階を経てマネジメントしていくかを考える必要があるのですが、これもその国の保健システムや関連するガイドラインや法・規則を知らなければ行動できないと痛感し、今後自分がどのような国で働くことになったとしても必須となる視点だと感じました。同時に、自分が担当する当該地域・国の背景を知る

ための必要な情報を限られた時間でいかに収集し、課題抽出・課題解決に繋げていくのか、という、公衆衛生活動を実施していくために不可欠な視点を養うことができたように思います。

バーミンガムはイギリス国内でも移民が多いことで知られています。こちらに来てから、日本にいるときと比べて、移民問題や民族・人種・信仰について考える機会が多いように感じます。これは公衆衛生活動においても非常に大切で、日本ではこのような話題に触れてしまうだけで差別的だと言われてしまうかもしれませんが、こちらでは、移民であることや白人ではないこと自体が住環境、収入、職業、保健行動、疾病構造に影響することが知られているため、それらの言及なくして人々の健康を考えることはできません。健康や保健が人の生活と密着していることや、その包括性、奥の深さを改めて感じるとともに、このような問題にいかにかアプローチしていくかを考えることこそが公衆衛生の醍醐味であると思っています。

普段の生活

私は大学の寮で他の留学生とシェアフラットをして過ごしています。留学生の出身国もさまざま、それぞれの国の習慣や文化について聞いて学ぶことができ

る良い機会になっています。彼女たちとは、クリスマスパーティーやムービーナイトをしたり、食事や大学のイベントと一緒に出かけることもよくあります。

寮から大学に向かう際には少し遠回りをして運河沿いを歩くのが習慣になっています。市内は自然が少ないのですが、大学の近くには運河や公園があり、自然も楽しむことができます。

大学の図書館は基本24時間開館しており、本のみならずデスクトップパソコンも多数整備されているため学生が勉強に集中できる環境が整っています。図書館の前には芝生が広がっており、晴れて気持ちのいい日はその芝生や外にあるベンチで勉強する学生であふれています(イギリスはなかなか快晴の日が少ないのが残念ですが…)。

また、バーミンガム市は今年の7月末に開催されたCommonwealth game(イギリス連邦に属する国や地域が参加して4年ごとに開催される総合競技大会)のホストタウンになっていたこともあり、大学も含めて街全体が大会前から盛り上がっていました。日本にいると馴染みのない大会にこのようなタイミングで巡り合うことができ、勉学以外にも新しい発見や出会いがあるのも留学生活の楽しみであると感じています、